『長崎国際大学論叢』 第11巻　2011年３月　67頁～73頁

研究ノート

自閉症児の余暇活動における保護者の支援ニーズに関する研究

黒　山　竜　太*，高　島　恭　子，豊　島　　律
（長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科、*連絡対応著者）

Support Needs of Parents of Autistic Children in Leisure Activities

Ryuta KUROYAMA, Kyouko TAKASHIMA and Ritsu TOYOSHIMA
(Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University, *Corresponding author)

Abstract

Autistic children are difficult to tackle their own leisure time to select. And also, their parents have heavy burden. So We have investigated the support needs of parents of autistic children leisure. As a result, Parents focused on fun on leisure activities. And parents focused on acquisition of specific skills in elementary school age. On the other hand, parents focused on interpersonal ties in leisure activities in junior high school age. In conclusion, supporters were asked to provide flexible services according to the age of children, and we discussed the importance of forming friendships of autistic children.

Key words

Autism, Leisure Activities, Support Needs

要　旨

自閉症児は自ら余暇を選択し取り組んでいくことが難しく、保護者の負担も大きい。こうした問題意識から本研究では自閉症児の余暇に関する保護者の支援ニーズについての調査を行った。その結果、余暇活動は楽しめるという点にとどまらず、小学生の年代では余暇活動に対して将来のことを考えて具体的なスキルを身につけることを重視しているのに対し、中学生の年代では余暇活動の中での対人的なつながりを重視していることが明らかになった。こうしたことから、支援者には子どもの年代に応じた柔軟なサービスの提供が求められることが確認されたとともに、自閉症児における友人関係形成の在り方の検討が重要であることが考察された。

キーワード

自閉症、余暇活動、支援ニーズ

１．問題と目的

余暇活動は、QOL の構成要素として中核指標の一つである（Schalock［2002］）。しかし、自閉症児においては余暇の乏しさが多くの研究によって指摘されている。その一つの要因として、友人を作るなどしてともに自ら選択して余暇を楽しむことが難しいとされる。郷間ら（2007）によれば成人の知的障害者は余暇活動をおおむね楽しんでいるものの、外出はほとんどが家族とともにであり、友人や仲間との外出は少ないという結果を報告している。また、Orsmond ら（2004）は自閉症スペクトラムの10歳から21歳までの185名、22歳から47歳までの50名の母親に対して、本人の仲間関係、社会的・余暇的

活動への参加に関する面接と質問紙調査を行い、全体のほぼ半数には同年代の活動をともにする互恵的・相補的な関係がなかったことを明らかにしている。こうした対人関係の持ちにくさからも、彼らに対して人的資源を活用した余暇支援の必要性が高いといえる。

一方、そうした子どもを持つ母親のストレスが問題として指摘されている。吉利ら（2009）は、発達障害児の保護者のストレスは本人に関わる側面と本人を取り巻く周囲についての２側面があり、関わりの難しさからくる本人の発達についての心配や、周囲の理解のなさへの疲労など様々な困難に直面していると述べている。このような問題から、保護者を含めた支援が必要であることはいうまでもない。今津ら（2007）は、自閉症児の母親のストレス、支援ニーズ、サポート源は子どもの年代により変化していくことを明らかにしており、その支援の在り方は年代などの要因を考慮すべき問題であることを同時に指摘するものである。

自閉症など発達障害児への余暇支援の実践としては、まずは学校での取り組みが挙げられる。特別支援学校では学習時間や行事などで余暇につながった内容を重視して取り組んでいることが報告されている（伊藤ら［2007］）、しかし、学校だけでは現在の彼らの QOL を支える上では限界があると思われる。奥住ら（2006）は、大学と特別支援学校が連携した発達障害児の休日活動支援の報告の中で、取り組みへの期待の大きさや新たに参加希望のある保護者はかなりの数存在する可能性を示唆しており、地域での数多くの取り組みの立ち上げが期待されるところである。

こうした背景を踏まえ、筆者らは2002年度よりＸ大学にてＹ市自閉症協会と共同して自閉症児余暇支援活動「Ｄくらぶ」（以下、「Ｄくらぶ」と記す）を運営している。活動の目的は自閉症児・者の余暇支援と学生のかかわり体験の場の提供である。活動は月に１回の土曜日ほぼ定期的に開催され、学生主体で学内での調理活動や近隣の公園での散歩や集団遊びなどを企画し行っている。「Ｄくらぶ」には毎回15名ほどの自閉症児・者やそのきょうだい児が参加し、学生が１対１で子どもを担当し、活動のサポートを行っている。その間保護者は基本的にゆっくりと過ごしたり、保護者同士の情報交換の場としての機能を図っている。

こうした活動において、自閉症児に対してどのような余暇支援が望ましいのかについて保護者のニーズを把握することが必要であると思われる。

以上より本研究では、自閉症児の余暇支援において保護者がどのような支援ニーズを持っているかについて調査し、今後のよりよい支援の在り方を模索することを目的とする。また支援ニーズ調査と合わせて、「Dくらぶ」に参加経験のある保護者に対し活動自体についてのニーズを調査し、考察によって今後の活動の一助とすることを目的とする。

２．方　法

対　象　Ｙ市自閉症協会に所属する、自閉症児を子に持つ保護者15名であった。

調査時期　2009年３月であった。

手続き　自閉症親の会において協力を得られた保護者に対し、「子どもたちの余暇活動に関するアンケート調査」を実施した。フェイスシートでは個人が特定されないことについて、また回答を強制するものではないことについて明記したうえで、保護者の年齢層、子どもの年齢層、自閉症親の会に入ってからの年数を選択式で尋ねた。アンケート内容は、宋ら（2004）を参考とし「１）子どもが放課後や休日に通っているところについて」について「学童保育」・「塾」・「音楽教室」・「各種スポーツクラブ」・「地域の子供会」・「療育センター」を選択肢に挙げ、加えて自由記述を求めた。次に「２）放課後・休日に通っている所の役に立つ面について」について「情緒を伸ばせる」・「少しでも何か身につけてもらえる」・「友達とかかわる時間を持てる」

「親がゆとりを持てる」を選択肢に挙げ、加えて自由記述を求めた。最後に「３）放課後・休日の過ごし方について、行政的にあるとよいと思われる支援」について、例として「もっと安全に遊ばせられる場所が欲しい、など」を挙げたうえで自由記述を求めた。

また、「Ｄくらぶ」に参加経験のある保護者に対しては、続けて「Ａ．参加回数」、「Ｂ-1．今まで思い出に残っている活動」、「Ｂ-2．その理由」を尋ねた。理由については「子どもが生き生きと楽しそうだったから」・「子どもが安心して取り組めていたから」・「活動内容が充実していたから」・「ほかの親とよく話せたから」・「親がゆっくりできたから」と選択肢を挙げた上で自由記述を求めた。また、今のままでよいかもう少し工夫してほしいかとその理由を、「Ｃ-1．開催のペース」、「Ｃ-2．活動の内容」、「Ｃ-3．学生のかかわり」、「Ｃ-4．集団で行なっていること」、「Ｃ-5．参加メンバー（子ども）」について尋ねた。

３．結　果

⑴　統計データ

まず、保護者の年齢層、対象児の年齢層、親の会参加年数の割合をFig.１～３にそれぞれ示した。保護者の年齢層は40代が10名で67％と最も多く、次いで30代が４名で27％、無回答が１名で６％であった。また、対象児の年齢層については中学生が６名で40％と最も多く、次いで小学校高学年が４名で27％、小学校低学年が３名で20％、就学前と無回答がそれぞれ１名で各７％であった。そして親の会参加年数については６～10年が７名で47％と最も多く、次いで１年以内が３名で20％、２～５年と10年以上がそれぞれ２名で各13％、無回答が１名で７％であった。

また、そのうち「Ｄくらぶ」に参加経験のある保護者は９名であり、今までの参加回数は「２～３回」が４名、「10回程度」が２名、「ほぼ毎回」が３名であった。

⑵　こどもが放課後・休日に通っている所

まず小学生以下で放課後・休日に通っている所は、療育センター（２名／２件）、日中一時支援施設（２名／２件）、生活介護施設（２名／２件）、デイサービス（２名／２件）、その他塾や音楽教室、絵画教室、地域の子供会などの活動（３名／６件）となった（複数回答）。平均利用件数は１名当たり２件であり、どこにも通っていないと答えた保護者はいなかった。

次に中学生では、日中一時支援（６名／６件）が大半を占め、その他ゲームセンターやきょうだいの塾の付き添い（１名／２件）などが挙げられた（複数回答）。平均利用件数は１名当た

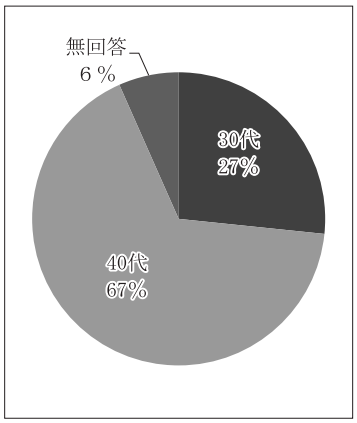

Fig. 1　保護者の年齢層

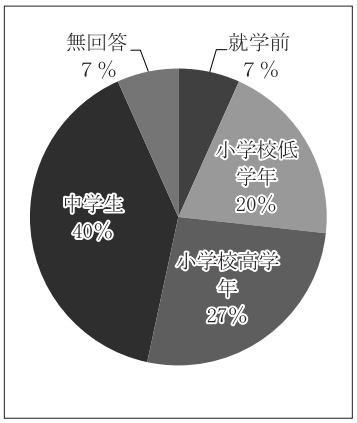

Fig. 2　対象児の年齢層

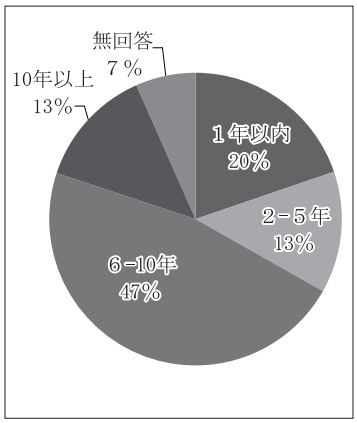

Fig. 3　親の会参加年数

り1.1件であり、どこにも通っていないと回答した保護者は１名であった。これはライフステージが進むごとに利用する支援機関の数が少なくなるという今津ら（2009）の調査結果を支持するものであった。

⑶　放課後・休日に通っている所の役に立つ面

放課後・休日に通っている所の役に立つ面として「情緒を伸ばせる」「何か身につけてもらえる」「友達と関わる時間を持てる」「親がほっとできる・用事を済ませられる（レスパイト）」「その他」のいずれかにチェックしてもらったもの（複数回答可）について、小学生以下と中学生で別々に回答した人数の割合を算出しFig. 4に示した。

小学生以下では、「レスパイト」が最も多く31%（４名）となり、次いで「何か身につけてもらえる」が23%（３名）、「情緒を伸ばせる」「友達と関わる時間を持てる」はともに15%（各２名）であった。一方、中学生では、最も多かったのは「友達と関わる時間を持てる」「レスパイト」の27%（各３名）であり、次いで「何か身につけてもらえる」の18%（２名）、「情緒を伸ばせる」の９%（１名）であった。

⑷　放課後・休日の過ごし方で行政的にあるとよいと思われる支援

自由記述で得られた回答を筆者らでカテゴリー分類した上でその人数の割合を算出するとFig. 5の通りとなった。小学生以下では「スポーツクラブ等の運動施設」が最も多い33%（３名）、次いで「室内での遊び場」「障害児専用の遊び場・施設」が22%（各２名）、「スキル獲得のための活動」「夜間・緊急時の預かり先」がともに11%（各１名）となった。中学生では「運動施設」が43%（３名）で最も多く、その他の項目はすべて14%（各１名）であった。

全体として、室内で遊べる施設に対する要望が多いことが伺えたが、特に中学生では運動を推進するための施設が切望されている現状が明らかとなった。

⑸「Dくらぶ」への評価と支援ニーズ

「B．思い出に残る活動」については、外遊びや調理活動が多く挙げられた。またその理由の多くに「子どもが生き生きと楽しそうだったから」が挙げられた（７名）。以下、「活動内容

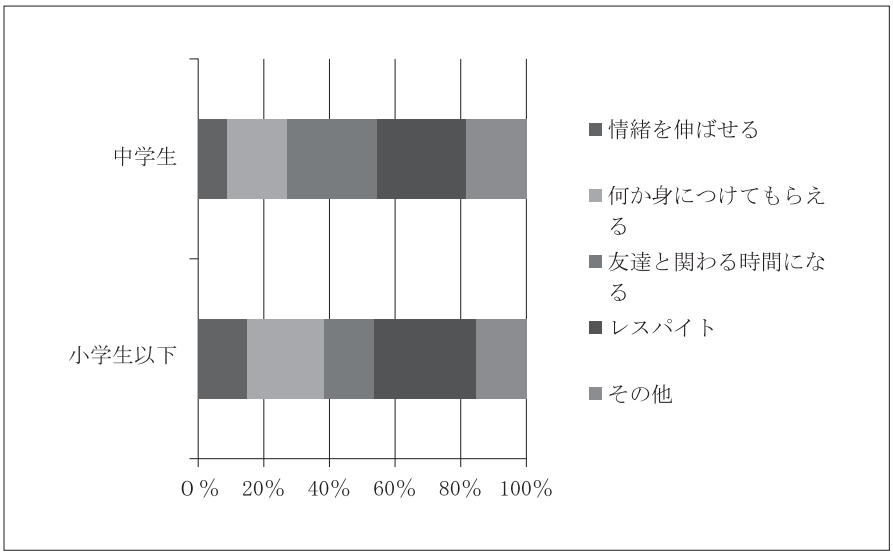

Fig. 4　放課後・休日に通う所の役立つ面

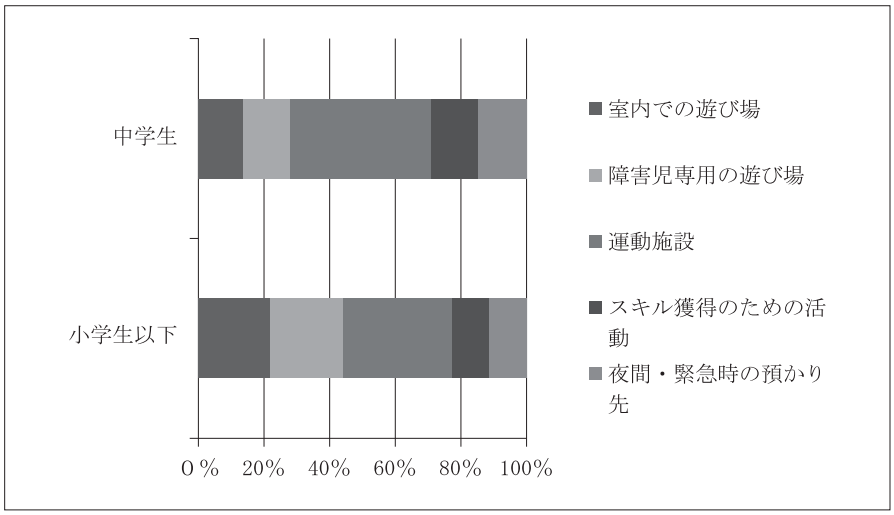

Fig. 5　放課後・休日の過ごし方で行政的にあるとよい支援

が充実していたから」は5名、「子どもが安心して取り組めていたから」は3名、「ほかの親とよく話せたから」は3名、「親がゆっくりできたから」は2名であった。

「C-1. 開催のペース」では全ての保護者から現状でよいとの評価を得た。「C-2. 活動の内容」については、外での活動を増やしてほしい・内容が固定してきている気がするといった意見を得た。「C-3. 学生のかかわり」については、『いろんな学生と接したいので1対1でなくてもよいのでは』『力が強い等配慮を要する子どもとの組み合わせについて要工夫』といった評価を得た。「C-4. 集団で行なっていること」については、全ての保護者から現状でよいとの評価を得た。「C-5. 参加メンバー（子ども）」についても現状でよいとの評価を得たが、1名より『児が者になったときの行き場を作ってほしい』という要望を得た。

4．考　察

(1)　保護者の捉えた自閉症児の余暇支援ニーズ

まず、本調査では40代の保護者が多かったことが特徴の一つであった。このことから親の会に定期的に参加する保護者は40代が最も安定しているのはないかと推察された。このことは、親の会に参加して比較的長い方が多かったことからも見て取れた。

このことを踏まえて、子どもの年齢が小学生までと中学生とに分けて考察する。まず小学生まででは、平均して2件の余暇活動先が挙げられた。またその役立つ面として、「レスパイト」に続き「何か身につけてもらえる」が高いことが特徴として挙げられた。子どものための余暇活動の場は保護者のゆとりの確保や用事を済ませるためなどに重要であることに加え、子どもの将来を考えソーシャルスキルや就労を意識したスキルの獲得への希望が強いことが伺えた。そのため、保護者は子どもの様々な可能性を模索して、また「情緒を伸ばす」ことも目的のひとつとして努力を重ねていることが伺えた。

一方、中学生では日常の余暇支援の場としてほとんどが「日中一次支援」であることに加え、その役立つ面は「レスパイト」と共に「友達と関わる時間になる」が最も多かった。小学生までと比べると、スキルの獲得はもちろん重要に違いないが、それ以上に「友達（同世代）とのつながり」が子どもにとって重要と認識していることが伺えた。一般に自己形成の発達の過程では、児童期頃から親や教師など大人とのタテ

の関係を経て友人や先輩・後輩などとのヨコの関係の重視に移行していくと言われる。発達障がいのある子どもたちとって家族以外の他者となる友人とうまく関係を形成することが難しい（武田ら［2009］）とされるが、保護者は子どもたちが友人関係をより求めていると認識しているのではないだろうか。また、年齢が上がり将来の子どもたちの自立の可能性への意識がより明確になることから、それゆえに友人関係の重視は子どもたちにとって特に重要と捉えられているのではないかと推察された。余暇支援の提供側にはこうした年齢に応じた柔軟な支援の在り方が求められていることが明らかとなった。

また、余暇活動に求めることとして、小学生まででではより他の子どもに迷惑をかけたくないという気持ちから専用の施設を臨む声が挙がった。ここには地域の理解など大きな問題が内包されているものと思われる。さらに中学生では「運動施設」の要望が多かったが、身長・体重の増加や思春期的な問題が入ってくるためストレス発散や体力の消費などに配慮する必要が高まっていることが伺えた。

支援者はこうした当事者の声を真摯に受け止め、よりニーズに応じたサービスの提供を行なっていく必要があるであろう。

⑵ 「Dくらぶ」への支援ニーズと要望

調査からは、子どもが楽しく過ごせることが最も多くのニーズを得ていることがわかった。また活動内容の充実も重要な要素であることが確認された。保護者に対するレスパイト機能については、活動としては意識しているものの保護者に対してはそういった意識は少なかった。これは、実施している中で明確に母子を分離することは行っていないためであると考えられる。保護者はゆっくり過ごされたり保護者同士で話をしつつも、子どもたちの写真をとったり一緒に調理活動に参加されるなどして子どもたちとともに活動を楽しむといった様子がみられている。こうした活動の在り方そのものは否定すべきものではないと考えるが、保護者に対するレスパイトを活動の優先的な目的として位置付ける際には検討が必要であるし、その際にはスタッフの役割分担をより明確化すべきなど改善点として留めておくべきであろう。

一方、いろいろな学生と接することを期待されるような記述や『児が者になった時の行き場を作ってほしい』といった記述がみられた。このことについて、一つには子どもが様々な人に慣れる体験を求めていることが推察された。しかし他には、こうした活動がより個人的な末永いつながりをもつきっかけの一つとなり得ることの必要性を含んでいるのではないかと考える。例えば「Dくらぶ」で知り合った学生と自閉症児が、活動の範囲を超えてつながりを持つことも期待されるのではないだろうか。渋谷ら（2006）が指摘するように、障害のない同世代との友人関係の構築、さらには両者の対等な関係づくりも自閉症児の将来にとって重要であろう。こうした関係づくりの土台をどのように築くべきかも大きな課題である。

5．まとめと今後の課題

本研究では、自閉症児の余暇支援の在り方について保護者にアンケート調査を行い、支援ニーズを明らかにすることを試みた。結果として年齢によって支援ニーズは異なる可能性があり、こうしたニーズに柔軟に対応する必要性が指摘された。ただし、今回の調査では対象者が少なかったことから、統計学的に処理・分析を行うことができなかった。今後サンプル数を増やした上で再検討が必要であろう。

また、今回は保護者に対するニーズ調査を行なったが、本来余暇とは QOL の向上の為に当事者が主体的に求めていくべきものである。岡本（2009）の実践研究のように、当事者の意思を尊重した活動の検討も必要であろう。

付　記

本研究は、2009年度長崎国際大学人間社会学部社会

福祉学科共同研究費によって行われたものであります。本研究が実施できたことに対し、関係各位に感謝申し上げます。

引用文献

1）Gael I. Orsmond, MartyWyngaarden Krauss and MarshaMailick Seltzer（2004）Peer Relationships and Social and Recreational Activities Among Adolescents and Adults with Autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders,* 34, 3, 245-256.

2）郷間英世・藤川聡・所久雄（2007）「知的障害者の余暇活動についての調査研究」『奈良教育大学紀要』56巻，1号，67-70頁.

3）今津芳恵・佐藤倫子・荻野佳代子・米倉康江・坂爪一幸（2007）「自閉症児の親のストレスならびに支援ニーズの把握に関する研究Ⅰ」『日本教育心理学会発表論文集』49巻，728頁.

4）今津芳恵・佐藤倫子・米倉康江・荻野佳代子・山口幸一郎・坂爪一幸（2009）「自閉症児の親のストレスならびに支援ニーズの把握に関する研究Ⅲ：支援機関利用の実態及び満足度調査より」『日本教育心理学会発表論文集』51巻，405頁.

5）伊藤健・菅野敦・橋本創一・浮穴寿香・勝野健治・片瀬浩（2007）「特別支援学校における余暇支援と社会参加に関する実態調査」『発達障害支援システム学研究』6巻，2号，59-64頁.

6）岡本邦広（2009）「学校生活への参加が苦手な知的障害を伴う自閉症児の意思を尊重した支援」『特殊教育学研究』47巻，2号，129-138頁.

7）奥住秀之・国分充・龍田希・飯田正朋・工藤麻由・樫木暢子（2006）「教員養成系大学と知的障害養護学校が連携して行うLD，ADHD，高機能自閉症等の児童生徒の休日活動支援の試み」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』57巻，313-318頁.

8）Schalock，R. L.（2002）Quality of life its conceptualization, measurement, and application.『発達障害研究』24巻，87-120頁.

9）渋谷真二・今野和夫（2006）「知的障害者と健常者の友達関係」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第28号，53-62頁.

10）宋慧珍・伊藤良子・渡邉裕子（2004）「高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと親の支援ニーズに関する調査研究」『東京学芸大学紀要第1部門教育科学』55巻，325-333頁.

11）武田喜乃恵・浦崎武（2009）「思春期の発達障害児に対する関係形成による発達支援―事例の変容過程に焦点を当てて―」『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』10巻，111-127頁.

12）吉利宗久・林幹士・大谷育実・来見佳典（2009）「発達障害のある子どもの保護者に対する支援の動向と実践的課題」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』141巻，1-9頁.